

下北半島尻屋崎の物見台遺跡の彫器について

—風韻堂コレクションの旧石器紹介—

齋藤 岳¹⁾

Graver Found at Monomidai Site, Shiriyazaki, the Shimokita Peninsula

Takashi SAITO

Key words : 風韻堂コレクション、物見台遺跡、彫器、研究史

1 はじめに

故大高 興氏が青森県に寄贈され、当館所蔵品となっている風韻堂コレクションは、つがる市亀ヶ岡遺跡出土品をはじめとして縄文時代晩期の優品が数多く含まれていることで有名である。そして、特に1979年以降、盛んに資料紹介されるようになり、1996年には当館で『縄文の玉手箱—風韻堂コレクション』の特別展示が開催され、その図録（青森県立郷土館1996）によって未紹介であった資料を含めて広く知られるようになった。また、その後の収蔵資料図録でも写真紹介されてきた（青森県立郷土館2001）。しかし、これまで図化されてきたものは土偶をはじめとした祭祀用具や土器などの資料が中心であり、まだまだ紹介すべき重要な資料がたくさん残されている。今後のよりよい活用を図るためにも、継続的にコレクションを調査研究していく必要がある。

そこで、本稿では下北半島尻屋崎の物見台遺跡（注1）の彫器について紹介することとしたい。この石器は『縄文の玉手箱』の図録でナイフ形石器として、収蔵資料図録でブレードとして写真紹介がなされている。

しかし、東通村史での物見台(1)遺跡の記述（工藤2001a）をはじめ、他の著書ではふれられておらず、一般にはまだ周知されていない資料といえる。そして物見台遺跡の資料は、日本の旧石器研究の早い段階（芹沢1959）から写真紹介されており、研究史上重要な遺跡である。そのため、本稿では、第一に資料の図化紹介を目的とすることとした。そして第二に物見台遺跡をめぐる研究史を整理することとしたい。

2 資料の内容

物見台遺跡の彫器の図と写真を1図と写真1に示した。大きさは長さ6.8cmで幅2.0cm、厚さ7mm、重さ9.0gである。石刃を素材として先端部の正面右側に加工があり、それを打面として正面左側に向かって彫刀面が形成されている。彫刀面の長さは1.1cmである。また、基部にも加工がなされている。そして正面の中央上部と裏面先端部付近に新しい欠損がある。また裏面右側の剥離は風化度が全体的に新しく、いわゆる二重パティナとなっている。剥離で凹の面になっているため、腹面の凸の部分と状態が異なった可能性も否定できないため、リングを入れて表示した。剥離の連続性はやや不規則な感がある。また正面上部の加工部分から基部の加工部分の間にも微細な剥離痕が形成されているが、反対側の側縁（裏面右側）の状況を考えあわせると、使用・廃棄後に形成された可能性がある。

石材は、灰オリーブ色の珪質頁岩で、中央から上部にかけての一部は黒色となっている。表面は風化し、正面基部の剥離加工の稜線は摩耗している。光沢があり、それは特に裏面に著しい。後述するが、現在、当館で借用展示している慶応義塾大学所蔵の物見台遺跡のナイフ形石器と風化の状況は類似している。

なお、風韻堂コレクションの台帳では、登録番号が16-1で、東通村の「物見台」の「ブレード」であること以外の情報は記載されていない。この石器については故大高氏の主著（大高1969）にもふれられておらず、氏のコレクションに入った経緯は明記されていない。しかし、様々な情報を総合すると、故大高氏と厚い親交があり、下北半島尻屋崎を研究フィールドとしていた慶応義塾大学の江坂輝彌氏の協力があったものと考えられる（注2）。

3 物見台遺跡の石器についての研究史

慶応義塾大学所蔵の石器は6点であり、芹沢長介氏によって早くから紹介されていた（芹沢1959）。1949年の岩宿遺跡発掘からちょうど10年、まだ旧石器時代についての情報が不足していた時代に2図1～4の4点が「ナイフ形石器」（23頁挿図40：巻末で江坂輝彌氏所蔵品）として、5～6が搔器として（22頁挿図36）紹介された。また、芹沢氏は同書24頁で「基部にはやや丸みをもたせたもの（茂呂型）と、先端部と同じようにとがらせたもの（杉久保型）とがある（図27挿40）」として紹介し、ナイフ形石器と、その杉久保型の代表例として紹介した。

1) 青森県立郷土館 主任学芸主査（〒030-0802 青森市本町二丁目8-14）

また、芹沢氏は翌年の著書で、杉久保型の分布についても「分布は、長野県北部から新潟県、さらに東北地方の青森県までのびているらしい。しかし、北海道からはまだ発見されていない」（芹沢1960）として遺跡名は明示しなかったもののナイフ形石器の地域性について、見通しを与える資料として扱った（注3）。

これらの影響は大きく、中村孝三郎氏は「杉久保型の刃器文化に属する遺物は中部地方北部から山形県南西部にかけて分布するが、断片的な資料を追求すると東北地方にも広がりを見せ、青森県下北半島にも杉久保型ナイフ形石器がみとめられている。おそらく日本海にのぞむ本州北半部にわたる分布がしだいに明確にされていくことであろう。」（中村1965）と述べた。また加藤稔氏は「東北地方の杉久保型ナイフ形石器の刃器文化のなかでは、尻屋崎遺跡が金谷原遺跡のものにやや親近性をもつようにみえる。」（加藤1965）とし、その後の論文でも同様の見解を記している（加藤1969）。なお加藤稔氏の論文（加藤1965）以降、物見台遺跡は尻屋崎遺跡という名称でもよばれることになった（注4）。

その後、岩本義雄氏の著作では実測図が掲載された（岩本1978；注5）。また同氏は翌年、青森県外ヶ浜町大平山元I遺跡の報告書で物見台遺跡について、研究史上の意義を含めて簡潔に記述している（岩本1979）。そして遺跡については、浸食が進み、遺跡の跡形もないという記述（平尾他1960）を引用し、遺跡の「位置を明確に知ることは不可能のようである」とした（注6）。

ところで、慶應義塾大学所蔵の石器については、採集者と採集時期について異なる記述が残されている。貝塚爽平他（1977）では「物見台は縄文時代早期の沈線文土器を出す遺跡として戦後注目をあびてきた。この付近から、江坂輝弥氏らが、ナイフ形石器、縦形搔器、挟入搔器などを採集している。」と述べている。岩本義雄氏は「戦後、（中略）慶應大学教授江坂輝弥氏は、再三にわたり下北を訪れ、この地を探索されたときに旧石器を発見されたのである。」（岩本1978）としている。三宅徹也氏は「角鹿扇三は、昭和初期ないしそれ以前に尻屋崎付近から杉久保型ナイフ型石器を（中略）採集していた」としている（三宅1981）。また、橋善光氏は「故泉山吉果岩屋郵便局長らが、戦前から終戦直後にかけて、尻屋崎物見台から石器を採集した。」（橋1994）と述べ、工藤竹久氏も東通村史の中でこれを引用している（工藤2001a）。また市川金丸氏は「昭和二十五年発見」（市川1991）としている（注7）。

そして、工藤竹久氏による東通村史などを除くと近年触れられることが少なくなった物見台遺跡であるが、柳田俊雄氏は東北地方の旧石器編年の論文で、後期旧石器時代の細石刃出現・盛行（第4期）の前の第3b期の記述の中で「いわゆる杉久保系の石器群も存在する。この一群は、北は青森県物見台遺跡までも発見された」と述べて、旧石器時代の中でも新しい時期に位置づけている（柳田2006）。

4 慶應義塾大学所蔵の物見台遺跡の石器

慶應義塾大学所蔵の物見台遺跡の石器は青森県立郷土館が借用し、展示中である。2図に岩本義雄氏の著作（岩本1978）に掲載された実測図を拡大のうえ転載し、番号を付して観察結果と計測値を述べる。石器は6点とも珪質頁岩であり、いずれも表面は風化している。

2図1～4は石刃素材のナイフ形石器である。いずれも剥離加工の稜線部分は摩滅している。1は長さ9.2cm、幅3.2cmで、正面左側の先端部に刃つぶり加工が認められる。基部の加工は不明確である。なお、1は裏面基部のバルブ付近に欠損もしくは加工が表現されているが、それが正面右下まで（実測図には表現されていないもの）及んでいる。そして、正面右下の基部には幅5mmほどの剥離加工もあり、それと重複している。切り合いの前後関係は不明であるが、欠損であるとすれば正面右下の基部にも僅かに加工がなされていた可能性がある。2はナイフ形石器であり、上下を逆にする置き方が自然であるが図の置き方に従って記述する。先端を僅かに欠損し、残存する長さは7.6cm、幅2.2cmである。基部は実測図の裏面右下側から正面左側へと刃つぶり加工が行われている。先端部は正面右側に刃つぶり加工が行われ、正面左側にも剥離加工がなされている。3は長さ4.7cm、幅1.8cmのナイフ形石器である。左側縁は基部から先端まで加工されるが、上部は刃つぶり加工が施され、基部側よりも急角度の剥離加工がなされている。右側縁は基部が急角度で加工されている。4は長さ3.4cm、幅1.6cmのナイフ形石器の基部側の破片である。上部の折れ面の風化は古いが、折れ面を切って正面の左上と右上の2箇所新しい欠損があり、全体の形をイメージしにくくしている。本来的にはナイフ形石器であり、3に類似した形態の可能性がある。5は長さ5.4cm、幅3.6cmの搔器である。刃部は幅広の石刃の先端に形成されているが厚みがあり、急角度の剥離が施されている。6は図の置き方で残存部の長さ3.5cm、幅3.9cmの削器である。不定形の剥片を素材としている。裏面図が割愛されているが、裏面を観察すると正面図の下側からの打撃で剥離されている。裏面（素材腹面）はリングに対応して凹凸がある。図の上辺は新しい割れによる欠損のため、凹の曲線となっている。刃部は正面図の左右にあり、左側の凹の曲線の刃部は正面と裏面の両側から加工されている。右側には裏面側を打面として凸の曲線の刃部をもつが刃部の厚さは2mm程度である。右側刃部が厚みがなく、左側の刃部が両面から加工され刃部幅も大きいことから削器とした。

1～5は、ともに石刃素材であり、しかも剥離は一方向からであり、打面転移を行わない石刃核から剥離されたものである。6は石刃素材ではないが、石刃石器群に伴っても不自然ではない石器である。

採集品のため、同一の文化層のものとは限らないことから風化の度合いを比較すると、1～4のナイフ形石器は剥離加工の稜線が摩滅している。5と6は、表面が風化しているものの、凸となる部分を含め剥離加工の稜線がほとんど摩滅せず、しっかりしている。同一遺跡であり、剥離加工の摩耗の程度が時間差を反映するものとすれば、5と6は本来的には、より新しい文化層のものである可能性がある。また、ナイフ形石器のうち、1は先端部を中心とした加工であり、基部に丁寧な加工が施される2～4と異なっている。また素材石刃も他に比べて大きく幅広である。時間差によるものかは不明であるが、2～4とは異なる形態のナイフ形石器であることが注意される。

5 まとめ

物見台遺跡の石器が研究史に与えた影響は①日本の旧石器研究の早い段階に写真紹介されたことから、杉久保型ナイフ形石器のイメージを全国の人に伝えたこと②中村孝三郎氏が述べたように、物見台遺跡が本州北端に位置していることから、杉久保型ナイフ形石器が山形県以北の未発見の地域にも分布すると予見させ、研究者に今後の研究を展望させたこと（中村1965）③ナイフ形石器の地域性・分布域の研究に影響を与えたこと（芹沢1974）④縄文時代の研究が中心だった青森県の考古学において旧石器の存在への注意と関心を与えたことがあげられる。

その後、旧石器時代の研究が、特徴的な石器の研究だけでなく、石器を群としてとらえる分析や火山灰を鍵層としての編年など、より総合的なものになり、北東北でも秋田・岩手県での旧石器時代の遺跡調査例が増え良好な石器群が発見されたことから、次第に採集資料である物見台遺跡の石器が言及されることが少なくなったものと筆者は考えている。

しかし、最北の杉久保型（系）ナイフ形石器・石器群として、その重要性は失われていない。そして、今後の研究の進展により、詳細な編年のなかに物見台遺跡の石器を組み込む事も可能となるであろう。

本稿は物見台遺跡の石器において、これまで知られていた慶應義塾大学所蔵品の石器のなかに含まれていなかった彫器を紹介し、同遺跡をめぐる研究史を振り返ったものである。資料紹介した彫器は慶應義塾大学所蔵品のナイフ形石器とは加工の稜の摩耗の状況が類似していることと、珪質頁岩製で素材石刃が同一方向から剥離されていることなど共通性が多く、同じ文化層、あるいは文化層が異なるとしても極端な時代差は考えにくいと思われる。

また、下北地方では彫器は東通村中野（1）遺跡（工藤2001b）、むつ市川内の松川上畑の例（斎藤2004）について3例目である（注8）。ささやかではあるが、今後の下北地方の旧石器研究の資料の蓄積につながるものと考えている。

そして、尻屋崎周辺では東通村史による中野（1）遺跡の資料紹介（工藤2001b）、慶應義塾大学阿部祥人教授らによるナイフ形石器や細石刃などの旧石器のさらなる資料紹介（阿部他2002）と東通村安部遺跡の発掘調査によるナイフ形石器の発見（阿部他2008）など、再び研究が活発になってきた。このような状況の中で、本稿では、物見台遺跡について研究史についても整理した。執筆者による記述の食い違い等複雑な内容を含んでいたが、今後の研究にやささかでも資することができればと願うものである。

6 おわりに

風韻堂コレクションを寄贈された故大高 興氏は2006年11月に81歳で逝去された。1万点を超える寄贈品は、まさに青森県の宝といえるものである。今後も、調査研究を続け、活用を図っていきたい。

謝辞

本稿を作成するにあたって、慶應義塾大学の阿部祥人先生、青森県考古学会会長の福田友之氏、青森県埋蔵文化財調査センターの佐々木雅弘氏から、ご教示とご協力を賜りました。深く感謝いたします。

（注1）物見台遺跡については旧石器時代の部分は物見台（1）遺跡（遺跡番号54012番）が正式名称である。しかし、すぐ南西に近接して物見台式土器の標式遺跡である物見台（2）遺跡（遺跡番号54013番）が位置している。石器の場合、遺物集中地点から離れて出土することもあり、現在の物見台（1）遺跡の範囲内かどうかは不明である。また本稿では研究史を扱うことから研究史上の遺跡名である物見台遺跡として報告する。

（注2）江坂氏と故大高氏の交友の厚さについては福田友之氏からご教示を受けた。また、東津軽郡蓬田村瀬辺地から採集した細石器様の石片についての故大高氏の報告（大高1972）を読むと、氏は縄文時代のみならず旧石器時代にも深い知識と関心があったようである。また同報告では江坂氏への手紙、江坂氏の来宅、江坂氏へ細石器様の石片を差し上げたこと等が記録されており、両者には厚い信頼関係があったことが伝わってくる。また、慶應義塾大学阿部祥人教授のご教示によると、1969年に慶應義塾大学で日本考古学協会が開催された折に、写真集が作られて来場者に配布されたが、その写真集にこの石器の写真が天地逆の形で掲載されているとのことであった。天地逆となっていたのは当館の台帳（故大高氏の認識）と同じ「ブレード」としての認識により、打面を上にしたためと考えられる。

これらから総合的に判断すると、江坂氏が資料を故大高氏に寄贈した、あるいは発見された新資料を写真撮影した後、資料の存在を紹介するなどして江坂氏の協力のもとに風韻堂コレクションに入ったといった等の経緯が想像される。

(注3) さらに芹沢長介氏は物見台遺跡の杉久保型ナイフ形石器の存在を念頭においてナイフ形石器の地域性について、後の著書でも詳述している(芹沢1974)

(注4) 尻屋崎という遺跡名については、加藤稔氏のその後の論文(加藤1969)や発言(貝塚他1977)でも使用され、東北大学考古学研究室作成の「日本旧石器時代主要遺跡分布図」(芹沢編1974)、それを追補した分布図(加藤・鶴丸1980)でも踏襲されている。また同年刊行された『日本の旧石器』の分布図(赤澤・小田・山中1980)でもShiriyazakiとなっている。著名な書籍である『日本の考古学 先土器時代』の研究史における影響の大きさ感じさせるところである。なお、物見岩遺跡となっているものもある(三宅1981)。

(注5) 市川金丸氏は別な実測図を掲載し(市川1991)、橘善光氏はこれを転載している(橘1994)。また工藤竹久氏も別な実測図を掲載している(工藤2001a)。

(注6) 遺跡の所在地については、遺跡地図の1981年のものは尻屋崎に向かう道路の東側部分にドットが記されており、1998年のものは、同位置ながらも道路の西側も含む形で記されている。工藤竹久氏は「江坂輝弥氏が作成した古い遺跡地図」と橘善光氏の記憶から、道路の東側部分を遺跡地とし、現在は遺物を採取できないことを述べている(工藤2001a)。そして、福田友之氏は1984年に橘善光氏と物見台遺跡を訪れた際に「物見台遺跡の旧石器地点一帯から」フレイクを採取し、後に写真紹介した際に「かつてここから採集されたナイフ形石器等の旧石器と比べ風化(パティナ)が余りすすんでいないことなどから縄文時代のものである可能性が高い」(福田2008)と述べている。

なお、筆者も1991年以降、数回踏査しているが、石器を採取できていない。

(注7) 岩本義雄氏の著作は「資料提供・江坂輝弥」として実測図がはじめて掲載されたこともあり(岩本1978)、江坂氏からの聞き取りをもとに記載されている可能性がある。なお、泉山吉果氏はムシリ遺跡・吹切沢遺跡を、角鹿扇三氏は物見台式土器の標識遺跡である物見台遺跡(2)遺跡を江坂氏に紹介した人である(江坂1950ほか)。角鹿氏採集説は、物見台遺跡の報告(江坂1950)の追記の「物見臺出土の角鹿氏採集の剥片石器」の文言から判断したことによる可能性などが考えられる。しかし角鹿氏は、1960年に、青森県東北町長者久保遺跡で発見された「ブレードや荒い打ち割りの剥片など」を見て「意外な出土品を前にして数十年前のことを思い起した。下北半島尻屋崎への途中、海岸の断崖上に石片が多量に散布している遺跡があった。まだ縄紋以前の石器という時代でもなかったので、ただ石器を作り、出来損ないを捨てた所として顧みなかった。近年に至り惜しい遺跡を逸したのも、精査を必要とする場所であったと、心中忘れることができなかつた。(中略)今思いがけなくその石器類に近いものをみる事ができた」(平尾他1960)と回顧しているので、その可能性は低いと考えられる。また、江坂氏は、物見台遺跡の調査報告の石器の項で「遺蹟附近には流紋岩の小破片が散乱して居り、本遺蹟に於て流紋岩製の剥片石器を多量に制作したと考へられる」とのべ追記で「又今夏八月十日、吹切沢遺蹟を發掘調査中の一日を利用、再び物見臺遺蹟を實査する機会を得、若干の土器片、流紋岩製剥片石器を表面採集」(江坂1950)できたとしている。「小破片が散乱」は角鹿氏の記述とも合致する。市川金丸氏が昭和25年(1950年)としている(市川1991)のは、この時に採取したと認識している可能性がある(なお、『日本考古学年報 4 昭和26年度』をみると江坂氏の1956年の八戸市白浜・小船渡平・八幡遺跡の調査に市川氏が参加していることが記されており、直接聞いた可能性も考えられる)。また江坂氏が物見台遺跡を踏査した昭和25年8月10日の調査日誌は東通村史に掲載されており(江坂1999)、その日に吹切沢遺跡の江上波夫調査主任以下41名が尻屋灯台見学をしたことが記されている。

物見台(2)遺跡は昭和24年に発掘されたが、中島全二氏と角鹿扇三氏が保管していた資料がきっかけとなっている(江坂1950)。泉山吉果氏が戦前から終戦直後にかけて採集していたのはムシリ遺跡等の資料である。

以上のことから判断すると、慶應義塾大学所蔵の旧石器は昭和24年以降、尻屋崎周辺で精力的な調査研究を行ってきた江坂氏の発見と考えるのが自然と思われる。ただ、貝塚爽平他(1977)で「江坂輝弥氏ら」と複数で発見された記述になっているので、物見台遺跡で江坂氏に泉山氏が同行して石器を発見した可能性は残る。そうであるとすれば、採集年代に誤解があるかもしれないもの下北地方の中核都市の市史である『むつ市史』で、地元研究者を主体にした形で記述して「故泉山吉果岩屋郵便局長ら」という表現で橘氏が記載した可能性も考えられる(また、想像をたくましくすれば、泉山氏あるいは角鹿氏の戦前の物見台遺跡からの採集資料の中から、江坂氏が1960年代に本稿で紹介した彫器を旧石器として再発見し、それが伝聞のなかで慶應義塾大学の所蔵品と混同された可能性も考えられる)。

なお江坂輝弥氏は泉山吉果・角鹿扇三・中島全二の三氏の交友について「野辺地在住で、一九四〇年代前半頃まで一時田名部にも在住された故角鹿扇三は、一九二〇年代頃から尻屋崎方面へ猟銃を持って狩猟に出かけられていたようであるが、この狩猟行で、岩屋郵便局長の故泉山吉果の父君で、その当時局長をされ、尻屋から岩屋、襲部付近の台上畑地を歩き、縄文時代の石器類を収集されていた人士に出会い、角鹿も石器、土器片などにも興味を持ち、尻屋崎付近での狩猟のかたわら、土器片、石器なども表採して歩いた。この角鹿と交際の開けた中島も、最初は角鹿とよ

く行を共にしたようである。従って中島と角鹿が東通村の尻屋方面の遺跡を踏査して歩き始めたのは、一九二〇年代後半頃にまで遡るようである」(江坂1999)と述べている。

(注8) 江坂輝彌氏は「川内町檜川字上畑」で「伐木の根を掘り起し中のところ」で偶然「旧石器時代の石器が発見された」ことを述べている(江坂1965)。かつて小野忠正氏が所有され、斎藤(2004)が資料紹介した彫器は、この時に発見されたものの可能性がある。なお、この彫器は彫刀面を切って剥離加工がなされているが、彫刀面を再生するための打面調整に関連する加工なのか、最終的に削器へ転用がなされたものか判断としない。小野忠正氏の収集品はムシリ遺跡採集の石刃鏃が青森県立郷土館に寄贈されたほかは、奈良国立博物館の所蔵となったので、この彫器も同館の所蔵品となっているものと思われる。

引用・参考文献

青森県教育委員会1998『青森県遺跡地図』

青森県立郷土館1996『縄文の玉手箱－風韻堂コレクション図録－』(本彫器は53頁 図版141)

青森県立郷土館2001『青森県立郷土館収蔵資料図録 第3集・考古編(2)』(本彫器は73頁 図版0508)

赤澤威・小田静夫・山中一郎1980『日本の旧石器』137頁 立風書房

阿部祥人・奈良貴史・米倉薫2002「下北半島における旧石器時代遺跡研究の重要性－遺跡・遺物と動物化石の検討から－」『史学』第71巻2・3号 301～319頁 慶應義塾大学三田史学会

阿部祥人・奈良貴史・渡辺丈彦・高田学・高田史穂他2008「安部遺跡(尻屋洞窟)」『平成20年度青森県埋蔵文化財発掘調査報告会資料』12頁 青森県埋蔵文化財調査センター編集

市川金丸1991「下北の旧石器時代」『第2回地域総合展「しもきた」叢書 下北半島』38頁 青森県立郷土館

岩本義雄1978「下北半島の旧石器時代遺跡」『下北半島の歴史と民俗』72頁 下北の歴史と文化を語る会編 伝統と現代社

岩本義雄1979「青森県における縄文文化以前の文化に関する研究史」『大平山元I遺跡発掘調査報告書』3～7頁 青森県立郷土館

江坂輝彌1950「青森縣下北郡東通村、尻屋、物見臺遺蹟調査報告」『考古学雑誌』第三六卷四号

江坂輝彌1965「下北地方の考古学的回顧」『人類科学』17集 43頁

江坂輝彌1999「東通村の古代遺跡の探索と調査の回顧」『東通村史 歴史編II』511・524頁 東通村

大高興1969『縄文文化遺物集成』

大高興1972「瀬辺地遺跡の細石器様石器について」『うとう』第78号 5～8頁

貝塚爽平・加藤稔・鎌木義昌・杉原荘介・芹沢長介・吉崎昌一・渡辺直径1977

『日本旧石器時代の考古学』138・330頁 学生社

加藤稔1965「東北地方の先土器時代」『日本の考古学 先土器時代』206頁 河出書房新社

加藤稔1969「東北地方の旧石器文化(前編)」『山形県立中央高等学校研究紀要』第1号 49頁

加藤晋平・鶴丸俊明1980「先土器時代の主要遺跡」『図録 石器の基礎知識I 一先土器(上)』表紙裏 柏書房

工藤竹久2001a「物見台(一)遺跡」『東通村史 歴史編I』682～683頁 東通村

工藤竹久2001b「中野(一)遺跡」『東通村史 歴史編I』814～816頁 東通村

斎藤岳2004「下北半島ムシリ遺跡採集の石刃鏃－小野忠正氏採集資料の再評価－」『北海道考古学』第40号 187～188頁

芹沢長介1959「ロームに潜む文化」『世界考古学体系 第1巻 日本 先縄文・縄文時代』17～38頁 平凡社

芹沢長介1960「ナイフ形石器」『石器時代の日本』64頁 築地書館

芹沢長介1974「石器の地方色」『古代史発掘 1 最古の狩人たち 旧石器時代』119～120頁 講談社

芹沢長介編1974『古代史発掘 1 最古の狩人たち 旧石器時代』巻末折込 講談社

橘善光1994「物見台遺跡」『むつ市史 原始・古代・中世編』21～22頁 むつ市

中村孝三郎1965「中部地方北部の先土器時代」『日本の考古学 先土器時代』244頁 河出書房新社

日本考古学協会1980『日本考古学年報1－5(昭和23年度～昭和27年度)』日本考古学協会

平尾勲・角鹿扇三・佐藤達夫1960「甲地村長者久保出土の石器」『上北考古会誌』1 1～4頁 上北考古会

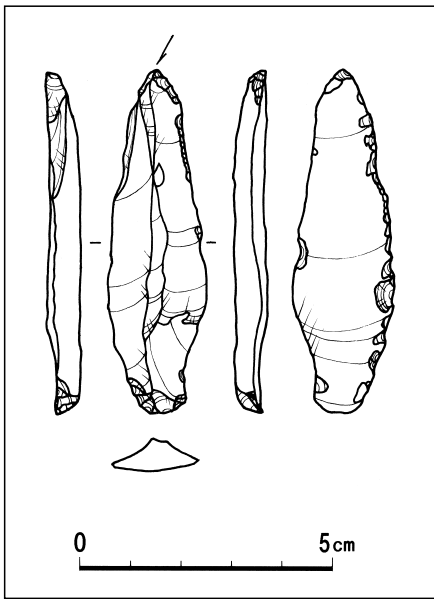
文化庁文化財保護部1981『全国遺跡地図 青森県』

福田友之2008「橘善光さんの思い出－昭和59年秋、下北半島尻屋崎の調査－」『青森県考古学』第16号 5～8頁

三宅徹也1981「東北各県の旧石器研究の歴史と現状(1)青森県」『旧石器時代の東北』46～48頁 東北歴史資料館

八幡一郎1959「新石器文化とその先駆」『世界考古学体系 第1巻 日本 先縄文・縄文時代』3頁 平凡社

柳田俊雄2006「東北地方の地域編年」『旧石器時代の地域編年の研究』170頁 同成社



1 図 物見台遺跡の彫器

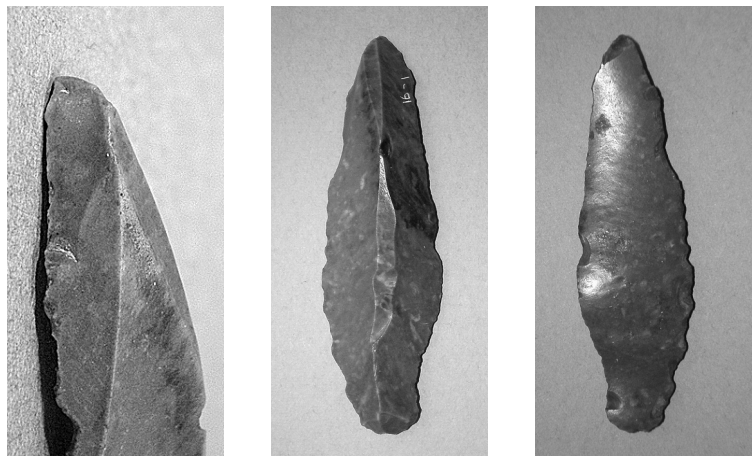
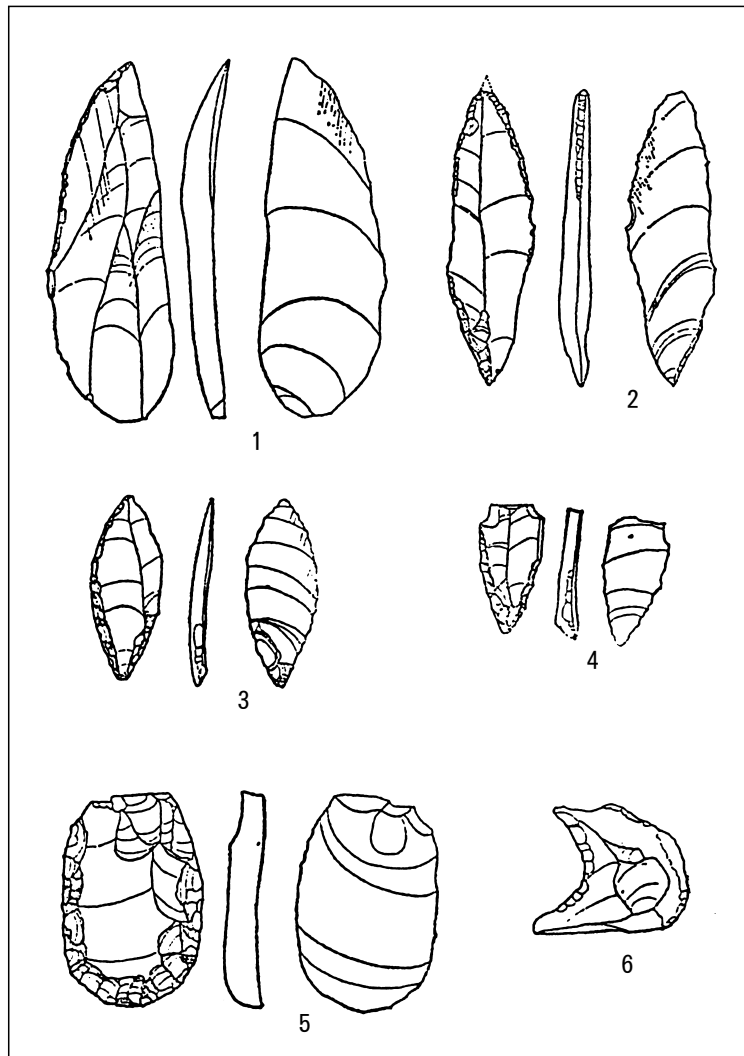


写真1 物見台遺跡の彫器（左：彫刀面拡大、中央：正面、右：裏面）



2 図 慶應義塾大学所蔵の物見台遺跡の石器（岩本1978をもとに番号を付して転載）